

## ミアとクーボ



次女のミアは、小さい頃から生きものに好かれる子だった。小学校に行く途中に、母親の友だちの家があり、そこにはイチローという大きな雄犬がいた。イチローは、遠くからでも匂いで、ミアが近づいてくるのがわかる。そうすると、いつもうれしくて、「早く来て！」と吠える。ミアが来て、イチローに近寄ると、走ってきて大きな身体をぶつけてくる。おしっこをかけるときもある。犬がおしっこをかけるのは、親愛のしるしなのだ。

我が家では、ミアが3歳くらいの頃からずっと文鳥を2羽飼ってきた。黒い羽のクーボが雄、白い羽のピッチーが雌だ。生まれたばかりのひなを買ってきて、細かくした餌で育てた。小さな鳥カゴの中だけではかわいそうなので、窓を閉めて、マンションの3DKの部屋中を自由に飛べるようにした。

朝、鳥カゴの戸をあけると、文鳥はさっと飛びたって、部屋中を飛び回る。

やすむときは、おきいりのばしよやすぶんちよういちばんおきいりのばしよ、  
ミアのてのひらだ。ぶんちようかぞく家族のみんながいっせいに「おいで！」と手  
のひらをさしだすと、わ2羽とも、いつもミアのてのひらにとまる。ミアのあねは、  
そのたびにちょっとざんねん残念そうだった。

あるとき、まいへやまどすこああるとき、1枚だけ部屋の窓が少し開いていたときがあった。そこからクーボ  
がそととだ飛び出してしまった。かぞくあ家族は開いていた窓とは別の部屋にいたので、しば  
らくそのことにきづかなかった。でも、どうもピッチーのようすがおかしい。

みぶなごえいっしょうけんめいわたしなにつたわたし  
身振りと鳴き声で一生懸命、私たちに何かを伝えようとしている。私たちは  
クーボがいないことにきづいた。どうやらクーボがそとで外に出て行ってしまったよ  
うだ。

あわてて、かぞく家族みんなで外を見ると、クーボらしい小鳥が団地の中を飛び回っ  
ている。ははおやミアはあわてて外に出た。クーボはだんちきゅうすいとうやね  
っていた。ミアがクーボによ呼びかける。でも、ひろいところに出て怖かったのだろ  
う。クーボはきゅうすいとうやねとた飛び立ってしまった。ミアはいっしょうけんめいなんかい  
クーボによ呼びかけて、て手のひらをさしだした。すると、なんかいめよ  
たえて、クーボはミアのちいさなて手のひらにおりてきた。

ぶんちようへいきんじゅみようねんねんへやなかじゅうとまわ  
文鳥の平均寿命は8年から10年だという。しかし、部屋の中を自由に飛び回  
らせていたからなのか、わやぶんちようながい我が家の文鳥たちは長生きだった。やがてピッチーは  
12さいくらいでな亡くなり、クーボはわ1羽だけになった。それでも、クーボはげんき  
だった。

ピッチーが亡<sup>な</sup>くなって 3<sup>ねんた</sup>年経ち、ミアは高校<sup>こうこう</sup>3<sup>ねんせい</sup>年生になり、大学<sup>だいがく</sup>受験<sup>じゅけん</sup>のための  
勉強<sup>べんきょう</sup>に集<sup>しゅう</sup>中<sup>ちゅう</sup>していた。クーボは15<sup>さい</sup>歳<sup>さい</sup>になっていた。ミアは休憩<sup>きゅうけい</sup>のとき、部屋<sup>へや</sup>  
のふすまを少<sup>すこ</sup>しあける。すると、クーボはその隙<sup>すき</sup>間<sup>ま</sup>からすばやくミアの部屋<sup>へや</sup>にピ  
ョンピョン跳<sup>は</sup>ねて入<sup>はい</sup>ってくる。そして、ミアの手<sup>て</sup>のひらにおさまるのだ。

寒<sup>さむ</sup>い冬<sup>ふゆ</sup>のある朝<sup>あさ</sup>、ミアはまだ自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>の部屋<sup>へや</sup>で寝<sup>ね</sup>ていた。すると、クーボが、閉<sup>し</sup>ま  
っているふすまに小<sup>ちい</sup>さな身<sup>からだ</sup>体<sup>なんかい</sup>を何<sup>な</sup>回<sup>かい</sup>もぶつけてきた。「中<sup>なか</sup>に入れて！」と言<sup>い</sup>って  
いるようだった。ミアがふすまをあけると、クーボはミアの手<sup>て</sup>のひらで安<sup>あん</sup>心<sup>しん</sup>した  
ように目<sup>め</sup>を閉<sup>と</sup>じた。数<sup>すう</sup>日<sup>じつ</sup>前<sup>まえ</sup>からクーボは少<sup>すこ</sup>しづつ弱<sup>よわ</sup>っていた。

その日<sup>ひ</sup>、ミアは、昼<sup>ひる</sup>は高<sup>こう</sup>校<sup>こう</sup>に行<sup>い</sup>き、夜<sup>よる</sup>は塾<sup>じゅく</sup>に行<sup>い</sup>かなければならなかつた。高<sup>こう</sup>校<sup>こう</sup>  
から帰<sup>かえ</sup>って、塾<sup>じゅく</sup>に出<sup>で</sup>かけるまでの間<sup>あいだ</sup>、ミアは、クーボの小<sup>ちい</sup>さな身<sup>からだ</sup>体<sup>なんかい</sup>をブランケ  
ットにつつんで、手<sup>て</sup>のひらで暖<sup>あた</sup>めてあげていた。クーボはど<sup>よ</sup>ん<sup>よ</sup>ん弱<sup>よわ</sup>っていつ  
た。クーボのことを心<sup>しん</sup>配<sup>ぱい</sup>しながら、ミアは塾<sup>じゅく</sup>に行<sup>い</sup>った。母<sup>は</sup>親<sup>おや</sup>は、ミアが塾<sup>じゅく</sup>に行<sup>い</sup>  
っている間<sup>あいだ</sup>に、クーボが死<sup>し</sup>んでしまうのではないかと心<sup>しん</sup>配<sup>ぱい</sup>だった。塾<sup>じゅく</sup>の終<sup>お</sup>わ  
る時<sup>じ</sup>間<sup>かん</sup>に、母<sup>は</sup>親<sup>おや</sup>は、ブランケットに包<sup>つつ</sup>まれたクーボをひざにおいて、車<sup>くるま</sup>でミア  
を迎<sup>むか</sup>えに行<sup>い</sup>った。塾<sup>じゅく</sup>が終<sup>お</sup>わって、ようやくミアはブランケットの中<sup>なか</sup>のクーボに  
再<sup>さい</sup>会<sup>かい</sup>することができた。

塾<sup>じゅく</sup>からマンションに戻<sup>もど</sup>って30<sup>ぶん</sup>分<sup>ぶん</sup>もしないうちに、クーボはミアの手<sup>て</sup>のひらの  
中<sup>なか</sup>で呼<sup>こ</sup>吸<sup>きゅう</sup>を止<sup>と</sup>めた。安<sup>あん</sup>心<sup>しん</sup>したよ<sup>ひょう</sup>うな表<sup>じょう</sup>情<sup>じょう</sup>だった。

(1562<sup>じ</sup>字)

(2020.4 Written by Masami KADOKURA)



この作品はクリエイティブ・コモンズ 表示 - 非営利 - 継承 4.0 国際 ライセンスの下に提供されています。この作品を利用する場合は、「たどくのひろば」を出典として示してください。

例) 出典:「たどくのひろば」(<http://tadoku.info>)

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License. When you use this work, please indicate the source as in the example above.